『ダ・ヴィンチ』第3巻第8号通巻28号　1996.8.6.発行　pp.190-193　リクルート

1996-42

宗教を理解することを通じて外国を理解することは、できるか

橋爪大三郎

SEXは見るものではなくヤルもの。さりながら、宗教は信じるものではなく理解するもの。言語派社会学の雄、橋爪大三郎が提示する10冊の名著をたよりに、思考と思想のインフラを探究する旅に出てみませんか。なんつったってこれからの教養は、コンピュータより宗教ですって。

取材・文／佐々木英輔　撮影／川上尚見

宗教はやっぱり怖いでも〝怖いだけ〟じゃダメみたい

オウム事件、そしてその裁判は、日本人に、あらためて宗教の怖さを思いしらせた。事件後の新聞社などのアンケートによると、多くの人（特に大人）の間で、宗教に対する忌避感がどっと高まったらしい。

たしかに宗教は怖い。狂信はおっかない。尊師のためには人も殺す（らしい）し、毒ガスもまく（らしい）。だからオウムはやっぱりやばい（らしい）。でも、みんなもっと怖いことを忘れている。

それは、世界中の多くの民族や国家が、独自の宗教を持ち、信仰し、価値観の根っこにしているということ。

もちろん、キリスト教やイスラム教、仏教やヒンドゥー教を、オウムといっしょくたにするつもりはない。でも、普通の人間には見ることも、さわることもできないもの、たとえば神とか真理を想定して、そこから世界や人間を考えていく〝形而上学〟である点では同じだろうと思う。

日本人は、なぜか〝知性的〟と呼ばれる人ほど、この手の形而上学を毛嫌いする傾向がある。だけど、資本主義や民主主義といった考え方にも、あるいは科学思想にさえ、根っこのところで宗教の考え方が影響を与えていることを思えば、単純に「宗教怖い」とも「宗教なんて迷信」とも、言っていられないって気がする。

そこで社会科学の権威、橋爪大三郎氏の薦める10冊は宗教がわかる本ということになる。橋爪氏は憂えている。

「日本人は根本的なところで他の人間のことを信じているんですね。同じ人間なのだから、話せばわかる、理解しあえると。だから宗教がいらないんでしょう。しかし、世界の大多数の地域では、そんな甘い考え方は通じない。他人は潜在敵です。他国も潜在敵です。しかし、敵同士でもなんとか共存していかなければならない。だからこそ、共存のルールとして宗教が必要だったのです。つまるところ、宗教を理解せずして外国を理解することも、ひいては、日本を外国に理解させることも決してできはしないでしょう」

宗教へのルートは2本信仰の道と理論の道まずはブッディズム

宗教を知るためには、まずは信仰、たとえばなにかの宗教に入信するのが必要なのかと思ってました。

「そんなことはありませんよ。われわれは宗教を通して、自分たちの属する世界と、それ以外の世界、つまり外国ですが、それらの根本的な成り立ちを理解しようとしているのです。ですから、宗教の理論を〝理解〟することがまず第一です。信仰は、そこから先の、個人の問題となります。そもそも多くの宗教は壮大な理論体系を持っているのですから、その把握には、相応の知的努力が必要になるのです」

「南無阿弥陀仏で幸福になろう！」なんて本じゃなく、先生の薦める難しそうな10冊を読む方が宗教を理解できるわけですね。

「……当然です。まず、中村元の『ナーガールジュナ』。中村さんは日本仏教学、特に原始仏教の権威で、立派な研究成果を数多く残していらっしゃいます。ナーガールジュナは漢訳で〝龍樹〟と書きますが、般若経のすぐれた注釈書である『中論』を著し、〝空（くう）の思想〟を説いた人物です」

色即是空の〝空〟ですか。（※注①）

「そうです。般若心経にある空の思想は、仏教思想の精髄です。空は〝無〟とはちがいます。そこのところが非常に難しい。しかし、空の思想を理解しなければ、仏教は絶対にわからないと言ってもいいでしょう。そのための最高の一冊だと思います」

次は平川彰の『初期大乗仏教の研究』ですね。これは小乗仏教から大乗仏教（※注②）への転換期のことが書かれているのかな。

「その通りです。大乗仏教の起源について、限られた資料にきわめて鋭い社会学的考察を加えています。後代の浄土思想や法華経について知るうえでも重要なテクストですね。さらに、これを読めば、なぜ日本人が本当の意味で仏教を受容できなかったのか、ひいては、オウム真理教が自称するような仏教教団ではありえないことまでが応用問題としてわかってしまうという、すぐれた本なのですよ」

どうしてなんですか。

「教えたげません。てっとり早く教えると興味が半減しますから。ヒントは日本人もオウム真理教も、釈迦の定めた250の戒律を守っていないという点にあります。後は各自で考えてみま

（※注①）空の思想……般若心経などに代表される大乗仏教中心思想。あらゆる存在には固定的な実体というものはなく、縁起によって生成・展開するという考え方。たとえば水は、温度などの縁起によって、水蒸気や氷に変わるわけで、実体として〝そのもの〟はありえないと説く。

（※注②）小乗仏教・大乗仏教……釈迦入滅後、その弟子たちはある者は山に、ある者は山野に寝起きして瞑想と修行に励んだ。しかし、そうした極端に禁欲的な修行をしたことを分かち、釈迦の遺骨を祀った仏塔（ストゥーパ）への供養と信仰を中心とした別派を形成した。後者は自身の悟りを求める大乗仏教と、それまでの個人的修行のみを目指す仏教を蔑みをこめて小乗とした。阿弥陀仏の信仰などは、ここから始まっている。

しょう」

仏教の最後は鎌田茂雄の『中国仏教史』ですね。

「ごぞんじのとおり、仏教はインドで生まれ、中国を通って日本に伝わったわけですが、中国を通ることで大きく変わっています。なかでも、もっとも変化したのは〝出家〟に対する考え方です。中国では、なんと出家をするのに政府の許可が必要だったんです。本来出家とは、社会の外、すなわち宇宙や彼岸に価値を見いだして、社会の枠から脱出する尊い行為です。しかし、中国人は社会の外側、言いかえれば、政治の及ばぬ世界に価値や意味を見いださなかったわけです。ゆえに、出家を尊いこととは思わなかった。そうした政治性の強い中国人の本質が、実によくわかる本なのですよ、これは」

欧米人の本当の怖さは、キリスト教を知らないと、理解できない

自慢じゃありませんが、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下『プロ倫』※注③)ぐらいは読んでます。

「たしかに自慢するほどのことじゃありませんね。しかし『プロ倫』を読んでいるのなら、引き続いてカルヴァンの『キリスト教綱要』に、ぜひ目を通してもらいたいな」

カルヴァンといえば、救済預定説の人ですよね。神に救われるか救われないかは、あらかじめ決まっていて、人間の努力ではどうにもならないってやつでしょう。あらかじめ決まっているなら、信仰なんかしても仕方ないと思うんですが。

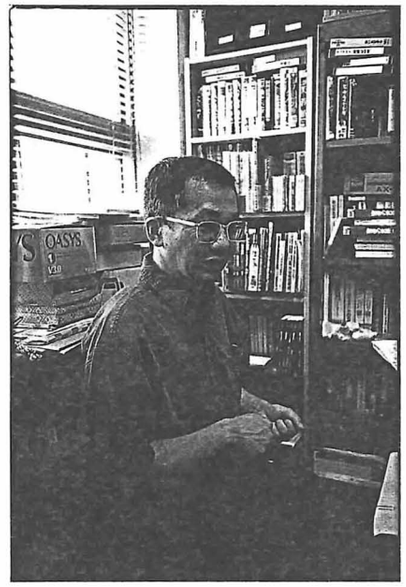
「いいえ。確かにカルヴァンの神学では、救済はあらかじめ決まっています。しかし、そこには必ず救済の〝しるし〟があることにもなっています。もし、自分が救済されていると思いこんで信仰や労働をおこたれば、それはそのまま神から見放された者の〝しるし〟と見なされます。そもそもカルヴァン神学においては、信仰を続けられること自体が神の恩寵であり、人間の自由意思など認めません。ですから、信者は必死で信仰を続けざるをえないのです。まさにハイゼンベルクの不確定性原理にもつながる世界観ではありませんか」

よくわかりませんが、シビアな考え方だとは思います。

「よくわからなくとも、このプロテスタントの理論が、欧米人の、さらに資本主義の根本精神を形成していることは事実ですからね。この理論の緊張感がわからないと、欧米人の考え方はわかりませんよ。たとえば、拝めば利益があるという宗教なら、利益があがれば、人は拝むことを忘れます。しかし、この理論に従うかぎり、人は休みなく信仰し、神に奉仕しなくてはならないのです。だからこそ欧米人は無限に富を集め、それを神に捧げようとします。資本主義の精神は、キリスト教信仰に裏打ちされているんです」

考えようによっては、欧米人の経済活動を邪魔するやつは、神の敵という理屈も成り立ちますね。おーこわ。

「それから、この本とあわせて、『キリスト教史』も読むといいです。カソリックとプロテスタントの関係を知るためにも、キリスト教の歴史は押さえておかないとね」



橋爪大三郎(はしづめ・だいさぶろう)
1948年神奈川県生まれ。
東京工業大学社会理工学研究科教授。
学生時代から構造主義を踏まえた
〝言語派社会学〟の樹立を目指して執筆を続ける。
性、言語、権力を基盤にした記号空間論を展開。
フリーでの執筆活動の後、
89年東京工業大学助教授。後に教授。
著書は『言語ゲームと社会理論―ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』(勁草書房)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)など多数。

宗教の数だけ世界がある 信仰の数だけ対立がある 神のために人は闘い続ける

キリスト教を考える以上、イスラム教とのかかわりは見逃せませんよね。湾岸戦争にせよ、最近の中東和平にせよ、宗教が理解できないと、見えてこないことがたくさんあるような気がします。

「そういう意味でも先ほどあげた『キリスト教史』は得るものが大きいですよ。イスラムとの対立にもふれられていますから」

なんでキリスト教とイスラム教はああも仲が悪いんですかね。

「歴史的に見ればキリスト教の責任ということになるのでしょう。もともと、ユダヤ教とキリスト教、そしてイスラム教は同系の宗教なんです。ユダヤ教のヤハウエも、キリスト教の父も、イスラム教のアラーも同じ神様なんですよ。イスラム教ではイエスを重要な預言者の一人と認めているぐらいで。しかし、キリスト教が教会という組織と、それを保護する国家を背景に発展してきたのにくらべて、イスラム教はあくまでコーランを拠りどころとしています。極論すれば、イスラム教徒にとっては、コーランと宗教裁判所さえあれば国家など必要ではなかったわけです。それが、国家と教会の二人三脚でやっているキリスト教徒から見ると、教化すべき低級民族に映ったんでしょう」

自分たちこそ、コスモポリタン(世界市民)と思っていたイスラム教徒が腹を立てるのも当然ですね。

「まあ、それ以外にも複雑な問題が多多ありますがね。それを知るためにも、ハッラーフの『イスラムの法』から始めてください。まず、これを読んでイスラム教の考え方をよく理解することです。さらにあわせてウェーバーの『古代ユダヤ教』も読む。ウェーバーは『プロ倫』があまりにも有名ですが、これも彼の優れた業績のひとつです。ユダヤ、キリスト、イスラムを貫く一神教の理論構造が緻密に分析されています」

これだけ読んで、しかもきちんと理解するのは容易じゃないって気がします。

「なんの、なんの。世界には実に多くの宗教がありますから、こんなのは序の口ですよ。これ以外では、保坂俊司の『シク教の教えと文化』、宮崎市定の『論語の新研究』、津田真一の『反密教学』などをあげておきたいですね。特に『反密教学』は、オウム真理教のヴァジラヤーナ(金剛乗)の考え方を理解するのにも必要ですから、興味深く読めるでしょう。くりかえしますが、宗教を探究することは、人間の思考を支配する最大のプログラムをたずねる知性の旅なんです。特に日本人は宗教への理解が不足してるわけですから、意識してやらなきゃいけません。そうでないと、本当に世界の人々とつきあっていけませんよ。わかっていただけますよね」

は、もう十分に……。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞　おまけ

制度の生成3

橋爪大三郎
『言語ゲームと社会理論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

996.2.10発行 pp.177 朝日新聞　おまけ

愛のかたち・家族のかたち2

橋爪大三郎
『性愛論』
岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的な方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること)を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの結果であること、性別はイデオロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」におすすめの一冊。

外国人とうまくつきあうための宗教本10冊

『中国仏教史』全5巻
鎌田茂雄　※1・2・3巻は品切れ
東京大学出版会　1万300円〜
中国社会に急速に浸透する仏教伝播の軌跡を、精密な資料分析と理論的追跡によって再構築する。インドからの翻訳僧の来朝、翻訳教典にもとづく学派仏教の成立、さらには道教などの土俗信仰と仏教との接点など、中国仏教の理解にかかせない一冊。

『反密教学』
津田真一
リブロポート　2987円
密教は、仏教における正統的な教理と呪術・土俗信仰とのダイナミックな結合によって成立した一種の神秘思想である。7世紀ごろに成立した大日経、金剛頂経を中心教典とする密教の思想を〝反対に〟たどり、原始仏教の思想と体験の核に迫る。

『古代ユダヤ教』
M・ウェーバー／著　内田芳明／訳
みすず書房　6695円
古代イスラエル宗教の1000年の発展過程を、自然環境、経済的状況、宗教倫理、経済倫理などの観点から分析した名著。後にキリスト教を生むユダヤ教の根本原理(一神教、契約の観念等)について社会学的な考察を与えている。

『キリスト教史』
J・ダニエル、アンリ・イレネ・マルーほか／著
上智大学中世思想研究所／訳　講談社
新約聖書成立の時代から現代に至るキリスト教の全体像を明快に解き明かすわが国唯一の総合的キリスト教史。ギリシア・ローマ思想との激しい対立を乗り越え、ついに公認され、ヨーロッパ思想の核となっていくプロセスを正確に把握できる。

『ナーガールジュナ』
中村元／著
講談社　品切れ
仏教思想における「空の思想」を、大乗仏教の思想基盤とし、その哲学的・理論的構成をととのえたのがナーガールジュナである。本書では、この人物の生涯と思想の両面に光をあて、その著作にして、インド思想史上もっとも難解なものとされる「中論」の理解へと導く。大乗仏教理解のための第一級の著作。

『イスラムの法』
ハッラーフ／著　中村廣治郎／訳
東京大学出版会　4200円
イスラム社会の法律は、その法源(法律的規範)を宗教においている。言うまでもなく第一法源はコーランであり、個々の裁判官はようやく第四法源であるにすぎない。イスラム社会を十全に理解するためには、イスラム法の基本的な理論を把握する必要があり、本書はそのために最適の一冊である。

『シク教の教えと文化』
保坂俊司
平河出版社　2800円
日本においては宗教的テロリズムの側面のみが強調されがちだったインドのシク教の実際の教えと、その独特な文化形態について、比較宗教学的な立場から実証的に分析した日本で初めての書。インド社会において、相対的にアンフェアな扱いを受けてきたシク教の実情、ひいてはインド社会の問題点を学べる一冊。

『初期大乗仏教の研究』
平川 彰
春秋社　7767円
小乗から大乗仏教への転換移行は、仏教の教理的組織的な発展契機として研究する意味が深い。本書では、原始仏教、部派仏教と大乗仏教の教理の比較検討、社会背景や初期大乗仏教教団の形成過程の精密な分析を通して、仏教の思想的社会的意味の核心にせまろうとしている。

『キリスト教綱要』
カルヴァン／著
新教出版　品切れ
カルヴァンの筆による本書は、キリスト教神学の大転換点であるとともに、近代資本主義精神の中核形成に寄与した点において、世界史的な価値をもっている。神学的正否はさておくとして、注目すべきは、その論理構成であり、世界観である。ウェーバーの著作などと併読すると、より理解が深まるだろう。

『論語の新研究』
宮崎市定／著
岩波書店　品切れ
西洋の聖書にくらべられる東洋の書をあげれば、言うまでもなく「論語」。多くの解釈、注釈によって発展してきた論語研究だが、今いちど原典にたちかえり、論語、そして孔子思想の本質を見極めようとする一冊。アジアの思想構造を理解するうえで欠かすことのできないテーマを扱っている。

著：山口 宏　定価880円
イラスト：松田大秀
ドラマティック・アクションRPG
『ガンハザード』の戦中秘話

風神の裔(ふうじんのすえ)
著：伊東麻紀
イラスト：米田仁士
定価880円

デコイ
著：小峯隆生
イラスト：前田真宏
CG：デンキゴンゾ
定価880円

株式会社アスペクト
〒151-24 東京都渋谷区代々木4-33-10
電話 (03) 5351-8191

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』1996.2.10発行　pp.10-11　朝日新聞

理論社会学

橋爪大三郎

社会学の25人❶

困難だがチャレンジングな理論の状況

Question❶ どんな学問か、その魅力は

社会学の研究分野は、大きく言うと理論／実証に分かれている。実証とは、アンケート調査や実地調査のことで、麦藁帽子をかぶって農村をとび回ったり、データをコンピューターで統計的に処理したりする。それ以外は、ひとくくりに理論とよばれる。理論と言っても実際には、外国の理論（横文字）を単に紹介するだけの人びとがほとんどで、本当に理論的な仕事をしているのはほんのひと握りにすぎない。

理論の任務は、ごく少数の基本的な前提から出発して、現象の全体を説明するモデルをつくり出すこと。この点、自然科学も社会科学も同じである。

社会現象の特徴は、再現性がないこと。現象が歴史的であるため、厳密に考えれば二度と同じことが起こらない。また現象が文化的であるため、社会ごとに規則性が異なる。このため、説明すべき現象がきわめて複雑で、それをうまく単純化しないと手に負えなくなる。このあたりを腕の見せどころにして努力を重ねているのが、理論社会学だ。

社会学の理論はいま、あってないに等しい状態で、国内はおろか世界的にもろくな理論がない。それだけ困難な領域なのだが、逆に言えば、もしもなにかここで成果を出せば、それがまるまる理論家個人の貢献として認められる。これほどチャレンジングな状況はない。

Question❷ いま関心のあるテーマは

当然のことだが、私の理論的立場を完成させること。

行為、関係、意味などが、社会現象を記述する基礎概念となりうることはしばしば指摘されてきた。私はそれに、身体、言語をつけ加えるべきだと考えた。またそれらとの関連で、権力の概念を構成すべきだと考えた。性（これは、身体の直接的な相互関係をいう）／言語／権力といった基本的要因の複合として、さまざまな集団や制度といった社会形象を再構成していくこと。それが〈言語〉派社会学である。

もうひとつ、現実的なテーマとしては、半世紀を経て解体した冷戦世界のゆくえ。ポスト冷戦の世界は、特定のイデオロギーや制度枠を欠いた、きわめて不安定な世界であることが明らかとなった。既存の社会科学は、こうした世界の出現に、ほとんどなんの準備もない。この世界を待ち受ける環境危機や南北対立といった問題と、正面から取り組んでいくことが急務となっている。

Hashizume Daisaburo

東京工業大学工学部教授。
1948年神奈川県生まれ。
東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。
著書に『言語ゲームと社会理論』
『仏教の言説戦略』『はじめての構造主義』
『橋爪大三郎コレクション全3巻』
『性愛論』『社会学講義』など。

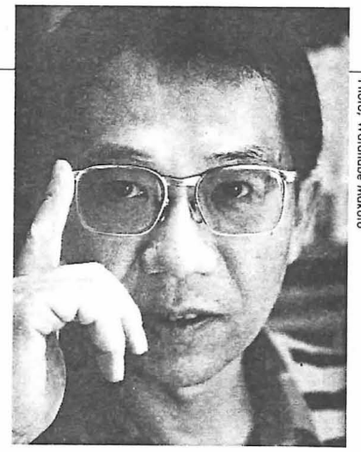


Photo: Watanabe Makoto

Question❸ どう学んだらよいか

まず、しっかりした古典を読むこと。読むに値する古典の数は限られている。マルクス、ヴェーバー、デュルケムを読まなければならない。これに、ホッブズ、ベンサム、ジンメル、モース、レヴィ＝ストロースをつけ加えてもいいかもしれない。古典の解説はたいてい間違っているから、鵜呑みにしてはいけない。二流以下の学者の書いたものも、信用してはいけない。よくある社会学の教科書は、読まないほうがいいものが多い。こうした古典を、ひとりで読むのは大変だから、読書会形式で数人で読むのがよい。同じものを読むと、一人ひとりの違いや能力の有無がよくわかる。互いに刺戟しあって、三倍くらいよく中身が吸収できる。

つぎに、自分の頭でよく考えること。社会学は、物理学のような意味で現象の説明に成功しているわけでないから、既存の知識や枠組みで説明できない現象を、いくらでも見つけることができる。そのなかで、自分に興味のある現象に注意し、考え抜く。何か思いついたことがあったら、文章に書いてみる。そして友人と討論する。これを繰り返すのが、標準的なやり方だ。

社会は人間の集まりだから、人間に対する理解力がないと、社会のことはわからない。社会に対するさまざまな人間のあらゆる見方をカヴァーしていることが、社会学者のクリアすべきひとつの条件である。人間に対する理解力を鍛えるには、すぐれた文学を糧とすること。文学は人間のもっとも深いところから発信される、第一級の情報である。これを利用しない手はない。そして、実際に生きている人間とつきあう機会を逃さないこと。他人に興味を持たず人間が苦手なタイプのひとは、社会学に向かない。

社会学は実験ができないというがそれは嘘で、実は、自分が生きることそれ自身が実験である。社会科学者である自分を自覚しながら日々を生きれば、論文のネタなど、一日に何ダースもみつかる。とにかく沢山書くことである。そうすれば、正確にものごとを観察し、思考することに慣れてくるはずだ。

忘れがたき人

小室直樹

私が実際に出会ったなかで最も優れた社会科学者は、小室直樹氏である。氏は、論理的・合理的な思考をする人で、間違ったことを言わない。気のきいた発言をすることも大切だが、間違った愚かな発言をしないこともそれに劣らず大切なのである。しかも氏は、社会科学に対する志がきわめて高い。自己に対する要求も厳格をきわめる。一見破天荒に見えるけれども、氏は社会科学のもっとも正統的な思考法をする人なのだ。

小室直樹氏は、変人・奇人ということになっている。特別に才能のある日本人はしばしば、いやほとんどの場合、不遇である。それは、才能のない大多数の人びとの、嫉妬や自己保身のしわ寄せである。社会学者は日本に何千人といるが、大部分はものの数にも入らない。だが彼らは大学にポストを占め、徒党を組んで才能のある人間を閉め出している。愚かなことだが、それが現実だ。小室氏がいなければ、私は日本の社会科学に絶望していたかもしれない。

『武蔵野美術』No.100　1996.4.15.発行
pp.30、46-47　武蔵野美術大学

●一〇〇号記念アンケート
’80年代の〈表現〉を問う

『武蔵野美術』創刊一〇〇号記念として開催された「シンポジウム――一九八〇年代の表現領域」と同一のテーマに沿って、私たちは各界の表現者や批評家や、雑誌や書籍の編集者、美術館やギャラリーの学芸員やキュレーターの方がたにアンケートへの回答を依頼しました。その設問は

1●あなたにとって一九八〇年代とは何ですか？　あるいは何でしたか。
2●一九八〇年代にもっとも印象的だった表現や出来事は何ですか。
3●一九九〇年代以降の表現をどんなふうに予測していますか。

の三点で、二五〇名の方にアンケート用紙を送り、五七名の方から回答をいただきました。回答者はつぎの方がたです(アイウエオ順)。

●天野一夫●天久聖一●飯沢耕太郎●石井達矢●いとうせいこう●伊藤誠●井上明久●宇佐美圭司●内田勝●梅本洋一●大熊敏之
●大嶋浩●大島洋●大月隆寛●勝井三雄●加藤雅久●北上次郎●北見隆●児玉房子●小西信之●小林康夫●サイトウ・マコト
●捧公志朗●サダヒロカズノリ●スージー甘金●杉浦茂●鈴村和成●高梨豊●高橋大助●建畠晳●谷川渥●近田春夫●千葉宏樹
●長井勝一●夏目房之介●西嶋憲生●橋爪大三郎●林牧人●日比野克彦●平田俊子●福田浩子●藤枝晃雄●藤田新策●松尾羊一
●丸尾末広●三浦俊彦●三上豊●三田格●港千尋●根岸芳郎●安原顕●柳幸典●山内直樹●山田太一●山本和弘●吉田直哉●四方田犬彦

(このアンケートは一九九五年一〇月から一一月にかけて実施しました)。

橋爪大三郎

●社会学者・東京工業大学工学部教授

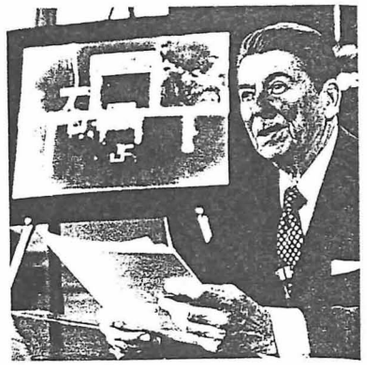
1――ポスト冷戦のまえに始まったポスト冷戦の時代だった。

2――中国の改革開放政策。

一九七九年にスタートした鄧小平の実験は、見事な成功をおさめ、冷戦の半世紀にピリオドを打つ直接のきっかけを与えた。

改革開放政策の前提は、米中和解であり、さらには中ソ対立である。中ソ対立そのものが、冷戦の前提である国際共産主義の枠に収まらない、奇妙な出来事であった。国際共産主義の原則から言えば、民族よりもプロレタリアの国際的団結が優先する。しかし、中国とソ連の対立は、実際にはその逆、つまり民族国家・国民国家のほうがプロレタリアの国際的団結よりも優先することを如実に示した。こうして中国とソ連のあいだの戦争の危険が切迫したものになると(少なくとも毛沢東はそう感じた)、米中和解の客観的な条件が生まれた。すなわち、アメリカは中国と同盟することで、共産主義陣営にクサビを打ち込み、対ソ戦略で中国カードを手にすることができたし、中国は中国で、劣勢な軍事力をカヴァーするアメリカの軍事的プレゼンスと、孤立を脱して国際社会へ復帰する道筋とを獲得したのである。

こうしてベルリンの壁が崩れるよりもちょうど一〇年早く、中国の市場経済化(要するに資本主義化)がスタートした。これが中国経済の潜在力を引き出し、ソ連の計画経済システムにとどめを刺した。ポスト冷戦よりもひと足先に始まったポスト冷戦の時代が、八〇年代だった。アメリカはレーガンのSDIによって、軍事産業をハイテク技術でもってバージョンアップすることをはかり(その成果は湾岸戦争で試された)、ソ連は無謀な軍拡でもって自分の首をしめていた。日本は軍事費たった1%のお気楽な消費社会を満喫していた。各国のちぐはぐはそれぞれ関連がないように見えたが、深まった矛盾の行き着いた果てはついにベルリンの壁の崩壊となって表れた。そこに開けたのは、地球大のひとつの市場の可能性である。国際分業もやり直しとなり、中国や東アジア諸国のように相変わらず好調な国々もあれば、ロシアのように立ち直るのがむずかしい打撃を受けた国もある。日本は五年連続の不景気に低迷している。そういう九〇年代への前奏だったのだ。


写真提供：WWP

3――美的表現についてはよくわからないので、思想表現についてのべてみよう。

八〇年代は、面白ければなんでもありの価値相対主義が支配的だった。マルクス主義は特権的な地位を失い、その他もろもろの思想のなかのひとつになった。さまざまな思想の断片が流通するばかりで、構築的な努力はほとんど放棄された。爛熟しつくしたテレビメディア。分衆少衆にターゲットを切り刻まれた雑誌。個人の好みであると言えば、どんな趣味でも許されるかわりに、その対極にある公共の領域は、ますます貧相になった。情報の洪水のなかで、ものごとをこう考えなければいけないという思想の輪郭は見失われていった。

この虚妄を打ち砕いたのが湾岸戦争。そして、阪神大震災とオウム・地下鉄サリン事件だった。面白ければいいだけのものが、面白いはずがない。思想として流通したものが、思想とは限らない。消費社会の現実性は、それが消費される(=貨幣に変換される)ことを根拠に結ばれていた。デフレで消費が縮小し、そうした現実性が雲散霧消したあと、残ったわずかのものから、九〇年代以降が出発する。それは多くの点で過去のさまざまな時代のリバイバルにみえるだろう。だがそれは、一周遅れのトップランナーを追い抜いてゆく、本当に先端的な試みの数々なのである。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞　おまけ

橋爪大三郎
『言語ゲームと社会理論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』
1996.2.10発行 pp.177 朝日新聞　おまけ

橋爪大三郎
『性愛論』
岩波書店・1995年

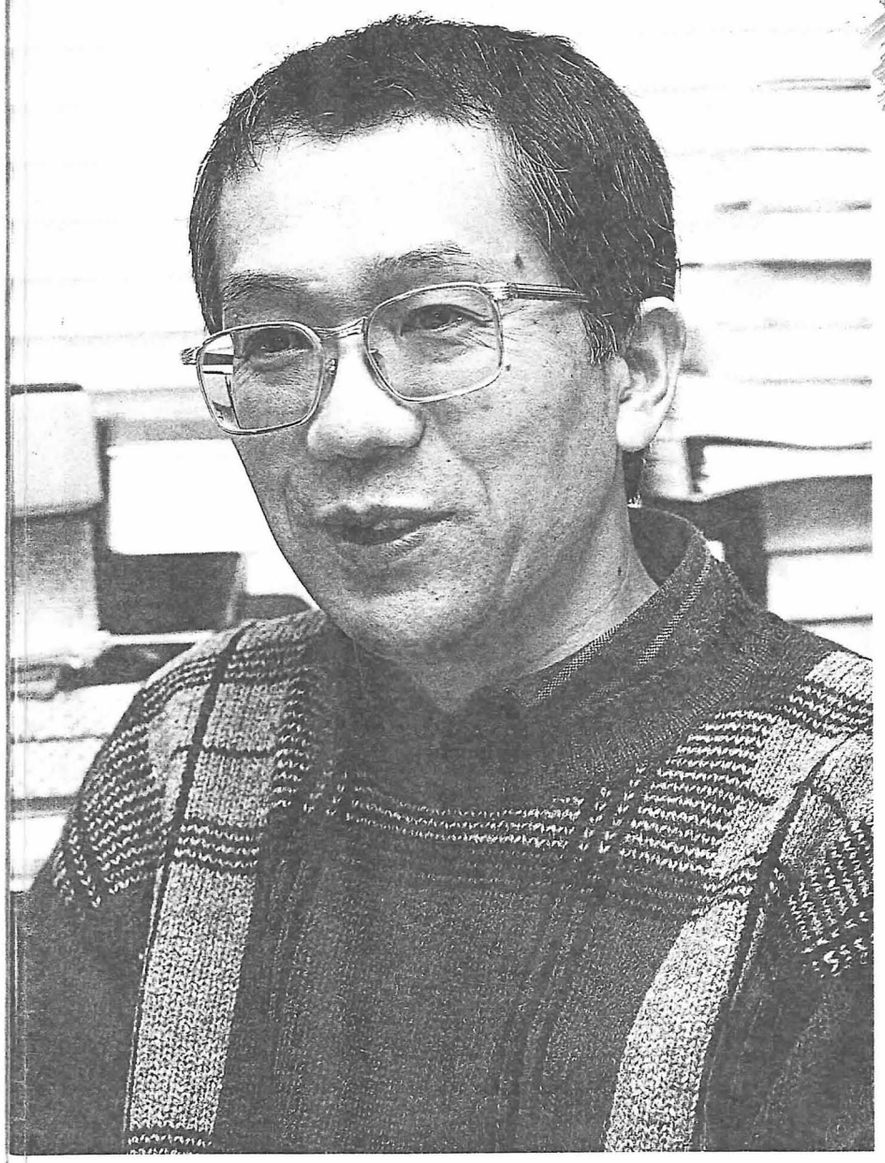
性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的な方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること）を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデオロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」におすすめの一冊。

『月間ぼんぶう』通巻179号　1996.5.1.発行　pp.6-8　日本医療企画

Hot Talk

橋爪大三郎

東京工業大学教授（社会学）



幅広い素養と知識を身につけ、決断できるリーダーが必要

——東京工業大学でこの四月から、社会理工学研究科価値システム専攻〝VALDES〟というコースを新設したそうですが、その目的は何ですか？

橋爪　VALDESでは、数学と哲学を二本柱にトレーニングし、さまざまな判断材料に基づいて決断のできるリーダーを養成するつもりです。確かに現在でもリーダーはいますが、真のリーダーとしてのトレーニングを受けてはいません。従来型のリーダーは、東大の法学部を出た人などが多かったわけですが、法学部で何をしているかというと、条文の解釈がほとんどです。それだけでは、目の前の問題に対して決断ができない。必要なのは、人間文化に対する、幅広い素養、そして、それをベースにした決断力です。

たとえば、ある問題が生じ、時間がたつにつれて広がりをみせた場合、それに対処するには、人類の歴史や文明、芸術や宗教の知識といった、幅広いバックグラウンドが必要になってきます。そういうものを削り落として、条文の解釈だけやっているような教育のあり方が問題なのです。

いまや合理的、科学的知識の裏付けなしにはリーダーたりえない時代です。こうした知識を身につけるトレーニングが、リーダーとしての必須条件になる。しかし、そういう場がないので、我々の手でやろうということで新設したわけです。

——その背景には、いまの社会には真のリーダーがいない、という問題認識があったのですか？

橋爪　そうですね。それが大きな動機の一つです。

昔は、真のリーダーがいたと思うのです。明治維新のころの政治家たちは、最新の科学技術を習得するために、語学を学び、欧米に渡って、見聞を深めていった。それが、学校教育制度が始まってから、○○学部○○専攻科で一つのことだけやっていればいい、というように変わっていく。軍部なら軍部のことだけ、官僚なら官僚のことだけしか考えられないタイプの人たちが出てきた。確かに、普通にやっていたのでは身につかないことを集中して勉強する必要はありますが、専門知識と同時に幅というものが不可欠です。

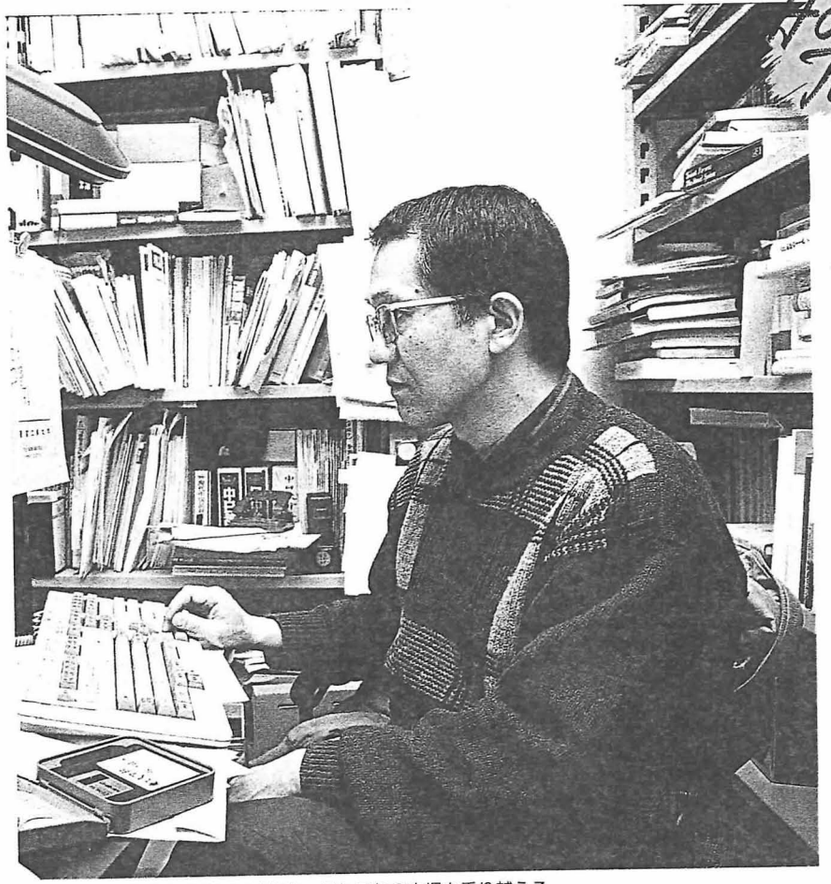
明治維新のころは、そういうものを学校ではないところで教わってきたし、リーダーの間にも厳しい生存競争があったと思いますが、いまは学校はもとより、どこも教えてくれません。だから、VALDESはその役割を果たしたいのです。ただ、ここを出れば安泰、リーダーとして何とかなる、というような甘い考えではいけない。

——「社会理工学研究科」という、理系と文系が同居したような名称をつけたのはなぜですか？

橋爪　日本では、理系と文系が結びついているとあまり思われていませんが、人間も社会も科学の対象になります。物事を系統的にみる「科学」という点では同じで、対象が違うだけです。だから、理系と文系とを分けることがおかしいのであって、VALDESは本来の姿を追求しようとしているのです。

一つの学問だけをやっていると、一応その分野の専門家にはなれるけれども、視野が狭くなり、本当の意味での問題解決が難しいのではないで

●はしづめ・だいさぶろう　1948年、神奈川県生まれ。77年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。学生時代から、構造主義を踏まえた「言語派社会学」の樹立を目指し、執筆活動を行う。89年、東京工業大学工学部助教授、95年同大学教授に就任。著書に「仏教の言説戦略」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「冒険としての社会科学」「自分を活かす思想／社会を生きる思想」（竹田青嗣氏と共著）「新生日本」（長谷川慶太郎氏と共著）「性愛論」「橋爪大三郎の社会学講義」などがある。



「医師と患者、先生と生徒、いずれも、それぞれの立場を乗り越えることは無理です。だからこそ、患者の立場を理解するために、入院体験学習のようなものがあってもいいと思います」（東京・大岡山の東京工業大学研究室にて）

しょうか。

たとえば、経済学者として知られているアダム・スミスは、もとは倫理学者でした。『道徳感情論』というのが彼の主著なのですが、人間の行動原理を考えていくうちに、合理的な交換行動、マーケットの役割といった分野にテーマが移っていったんです。

質の低い医療機関は淘汰されていく

――医師も、一つの学問を集中的に学んできたという面があります。医療あるいは医師の世界をどうみていますか？

橋爪　教育と医療の世界を比べると、医療のほうが進んでいてうらやましい面がたくさんあります。それは、競争があるからです。

子どもたちは、高校までは行くところがだいたい決まっているから、学校がどんなに質の低い教育をしても生徒が集まらなくなることはない。一方、医療機関は、質の低い医療を提供していたら、患者が減って、しまいには倒産してしまう。医師たちは、技術面でも、患者に対するサービスの面でも努力が要求される構造になっている。

――いまの医師あるいは医療について、どんな問題点が指摘できますか？

橋爪　昔、医師は非常に高度な専門技術職で、社会的な威信も極めて高かった。医師自身もプライドをもち、畏れ多い存在でした。いまは、私たちにとって幸いなことに医師が増えてきており、誰でも、どこの病院にでも行ける世の中になった。いまや患者に選択権があって、医師は普通の職業の一つになってきているんですね。これは、問題点というより、むしろ自然な流れだと思います。

医師の労働実態をみても、給料はそんなに高くないし、休みも少ない。結構きつい仕事だということが、一般にも認識されるようになった。こういう流れをみていると、今後は、専門的な高度技術を持つ医師、地域医療を担う医師、予防・健康増進の分野で働く医師といったように、いくつかのタイプに分かれていくのではないでしょうか。

（聞き手：本誌・戸祭智之）

南日本　おまけ

聞　1996年(平成8年)5月30日　木曜日　文　化　12

キャンパス探訪

合言葉は「21世紀の首相」

理系文系合わせた新学科

東工大の挑戦

大学が〝ぞうげの塔〟といわれ、社会とかかわりなく存在できたのは、はるか過去の話。大学・短大への進学率が四〇％を超え、十八歳人口の減少で五〇％の大台に乗るのも時間の問題となった今、大学は激しい変革の波に洗われている。二十一世紀に向けた新しい大学とは何か、各大学の模索が始まった。

◆大学の顔に

「価値システム専攻」（略称バルデス・VALDES）という聞き慣れない学科が今春、東工大（木村孟学長）大学院に開設された。「社会のトップに立つリーダーに必要な資質（価値システム）と能力（意思決定能力）を身につけるための大学院（説明会資料）だ。同時に「人間行動システム専攻」学科も新設された。

共に、理工系と人文社会系の学問を融合させた、世界でも初めての領域で、理工系大学として、米のMIT（マサチューセッツ工科大学）と並んで世界に知られる同大の新しい顔に、と期待が集まっている。バルデスには、ユニークな音楽論で知られる細川周平氏を助教授に起用、文化人類学の上田紀行助教授を愛媛大から招くなどスタッフの充実にも力を入れている。

この新学科が生まれるまでには、長い時間がかかった。平成元年に出された「東工大の将来計画」という報告書がある。この中で、従来の学問の研究だけでなく、「人間社会と調和する社会技術」を強調した新学科の開設が、提案された。

「環境問題への関心が高まってきた時期で、便利さだけでなく、人にやさしい技術が話題になりはじめたころでした」と語るのは森川陽・同大原子炉工学研究所長。新学科設置準備会の座長だった。

◆追い風

「このときは、文明科学部や情報学部などが提案されたが、機が熟さず、実現しなかった。外的な要因としては、行政側が新学科の必要性を感じていなかったことが挙げられる。それが、一九九一年に出された『設置基準の大綱化』が追い風となった」

「大綱化」とは、大学審議会の答申を指す。「大学教育の改善」「大学院の整備充実」などを柱としたもので、国際化、学際化が進む中で、より柔軟な大学教育を推し進めようという狙いで出された。具体的には一般教育と専門教育の科目区分は廃止し、各大学で自由にカリキュラムを編成できるようになった。

以後、各大学は教養部の廃止ないし改組、またカリキュラムを改革するなど、大学改革が活発化。新学科設置という試案が、一挙に現実味を帯びた。が、問題はどんな学科にするかだった。

「理系と文系を合わせた、新しい学問領域があるのではないかと模索が続いた」と語る同学科の橋爪大三郎教授。

◆多彩な学生

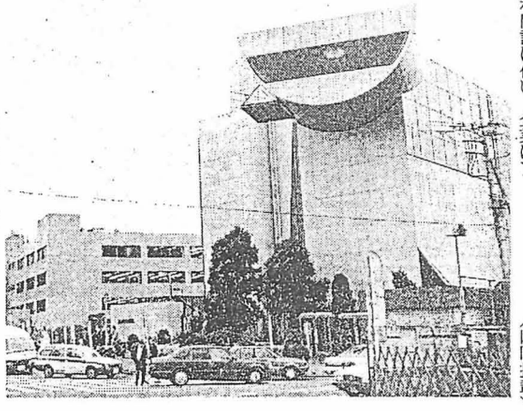
変革の時代にふさわしいざん新な学科を、と、関係者による長い討議が繰り返され、その結果がバルデスとなって結実した。新学科創設の狙いは、これまでエリートの代名詞だった東大法学部卒を超える、リーダーの養成だ。

「エイズ問題で厚生大臣としては目覚ましい指導力を発揮した菅直人氏は、東工大出身。評論家大前研一氏も東工大大学院卒。このような理数系の合理的な思考ができて、従来の枠にとらわれず活躍できる人物を送り出したい」と橋爪教授。

百人を超える志願者の中、バルデスに合格したのは、修士、博士課程合わせて十八人。中には民間のシンクタンクに籍を置いている学生やマネジメントコンサルタント業を開業している人など多彩な顔触れがそろった。

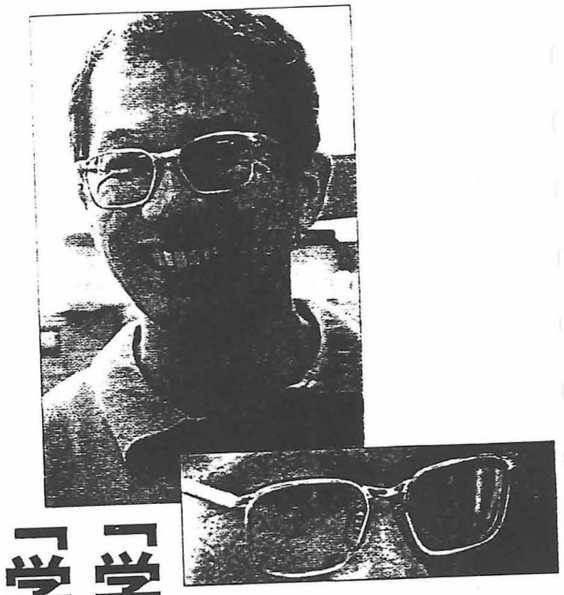
学科開設に伴い、企業にアンケートを行ったところ、反応は非常に良かったというが、「ここを出たからといって社会で優遇されるわけではないから、卒業生を待ってるのはいばらの道。が、道を切り開く武器はここで与え、送り出す。合言葉は『二十一世紀には、一人と言わず、何人かの首相を出そう』です」と橋爪教授の夢は広がる。

（随時掲載）



東工大正門

『高2講座エンカレッジ小論文』 第210号 pp.14〜15 ベネッセコーポレーション 1996.11.1.発行



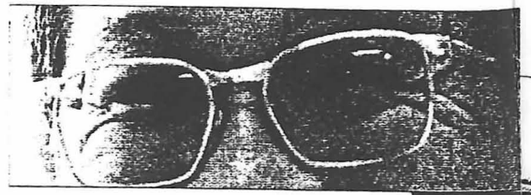
「学生が学校に合わせる」から「学校が学生に合わせる」へ

今の日本の学校システムは、社会の変革に合った「新しいモノを創り出す人材」を育成しているだろうか。現在の教育の問題点、具体的な学校教育改革私案を、東京工業大学で大学院改革を実施した橋爪大三郎教授に、聞いてみた。

橋爪 大三郎 教授

これまで日本では、集団のガンバリズムが生産を向上させてきました。そこで教育現場も、集団全体が揃って学力を向上させていくことを重視してきたのです。ところがこれからは、自分の目的を自覚し、実行に移していく能力のある人材でなければ役に立たない。では、教育は、変わったのでしょうか。何も変わっていませんね。

人間は一人ひとり発達テンポも違えば、能力も違うのに、相変わらず、人間を集団とみて、同じことをやれと言い、同じことができなければ叱る。まったくおかしいことです。そこで、「教科選択制」をもっとどんどん導入するべきだと思います。社会に出るために必要な基本的能力である国語と算数は必修にする。それ以外は個性や興味に合わせた選択科目とする。つまり、「学生が学校に合わせる」のではなく「学校が学生に合わせる」べきなのです。



また、さまざまな分野で規制緩和や自由化が叫ばれているわりに、教育は自由化されていません。学校が生徒をふるいにかけ、教育機会を奪っている。その結果、学校の間に競争原理が働かず、いい教育をする努力をしていない学校も生徒数が確保できます。そこで、現在の学区制を廃止して、自由に学校を選ばせるようにしてはどうでしょうか。そうすれば、いい教育をしない学校は生徒が集まらずに淘汰されていくはずです。誰もが自由に行けるからこそ、学校同士が競争して、教育がよくなるのです。

もちろん小中高だけでなく、大学ももっと自由化するべきです。

学力はともかく、まず入りたい人を受け入れ、急角度で学力を伸ばしてあげることが、教育機関としての役割であるし、大学間の競争にもつながる。「入るのは難しく出るのは簡単」という現在のかたちは、入ったときの学力をまったく伸ばさないし、大学は教育機関として機能していないということじゃありませんか。もちろん、レベルに達しなければどの講座も単位は取れません。勉強の目標は卒業だけではないのですから、卒業できない人も勉強したことは身につく。「大学の自由化」＝「大学はすべての人に開かれている」ことが理想の形だと思います。

あと、「文系・理系の区別」もやめるべきでしょう。この区別は、会社に就職してから、理系は技術部門や研究所、文系は営業や人事・総務に携わり、手分けして会社を支えましょうという、予定調和なのです。知識が偏っているから、社員が独立したくてもできない。本来、学問はすべて有機的に結びついているのです。物理と経済、数学・論理学と哲学など…すべてが密接に結びついていて、ある現象を解き明かすためには、それらをトータルに科学する態度が必要です。「創造性」をいうのだったら、まずさっさと「文系・理系」の垣根を取り払わないとダメなのです。

そこで、私個人にできることからまずはじめようと思って昨年、東京工業大学大学院で「VALDES」という専攻をつくりました。ここでは、「文系・理系」の枠を取り払っています。混沌として入り組んだ日本という社会を再組織する人材、もっと全体のことが見通せる人材が切実に求められている現在だからこそ、問題の数理的な把握ができる「数学」的素養と、価値観の異なる人との対話の中から解決を導く「哲学」的素養を兼ね備えた人材を育てたいのです。今年の4月にスタートしたばかりなので、結果が出るのはこれからなのですが、VALDESから新しい社会的リーダーを育成できればと思っています。

橋爪大三郎(はしづめ・だいさぶろう)
1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学教授。『冒険としての社会科学』『現代思想はいま何を考えればよいのか』など、著書多数。教育問題から政治、国際問題、恋愛にいたるまで、さまざまな分野にわたる見解を発信している。この4月、文系・理系の枠を取り払って学ぶ東京工業大学・社会理工学研究科価値システムVALDES専攻(大学院)を新設。

学校教育改革に向けての文部省の動き

学校教育改革が叫ばれて久しいが、大きな動きは起こっていない。今年度より改定された文部省「高等学校指導要領」によると「基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」とあり、画一的教育からの脱却を試みているが、その効果のほどはまだわからない。しかし、「高等学校指導要領」自体、抜本的改革にはなっていないとの声も多いのが現状。

のろのろと進みつつある大学改革

1991年、文部省の「大学設置基準」が改定され、大学の個性を生かした講座やカリキュラムが持てるようになった。同省の調査では、全国の国公立私立大学の83.6%が「カリキュラム改革に着手している」と答えており、大学改革がじわじわと進んでいる様子がわかる。しかし、学生定員を基礎とする現制度のもとでは入試改革は事実上不可能で、橋爪教授のいう「誰にでも開かれた大学」は、まだ存在しない。